

## 2 就学に向けて

### ○ 早期からの保護者への情報提供

保護者にとって就学先の決定は、最大の関心事であるとともに、大きな心配や不安のあるところでもあります。保護者への早期からの情報提供は、こうした保護者の不安等を和らげ、スムーズな就学先の決定に向け大切です。

各市町村教育委員会では、就学に関する情報をホームページに掲載したり、パンフレット等で発信したりしています。

詳しいことは、市町村教育委員会に問合せをするとよいでしょう



また、各教育委員会や相談機関では、就学に関する相談窓口を設けています。ここでは障害のある子どもの成長・発達や就学について、保護者の方が抱えている様々な不安や疑問に対して丁寧な相談や適切な助言が行われています。

こうした資料の活用や相談機関へつなぐなどして、保護者への啓発を進めましょう。

<日ごろの子どもの様子を観察し、次のような点を整理しておくことで相談が円滑に進みます>

- ① 日常生活を送る上で、どのようなことで困っていますか。
- ② 学習をする上で、どのようなことが気掛かりですか。
- ③ それらの困難やつまずきに対して、どのような手助けが必要と思われますか。
- ④ 好きな遊びや興味があること、意欲的に取り組んでいることはどんなことですか。
- ⑤ 気持ちの表現の仕方、どのようなことが気になりますか。
- ⑥ 集団活動への参加の様子や他の子どもとのかかわり方で心配なことはどんなことですか。

(「子どものニーズに応じた教育的支援のために」特別支援教育推進連盟より引用)

### ○ 保護者への支援のポイント

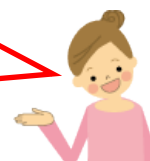
- ・ 保護者の置かれた状況や考え・心情を理解する。
- ・ 保護者の伴走者として対応し、すべきことの優先順位を共有する。
- ・ 保護者の意向を最大限尊重しつつ、本人の教育を第一に考える姿勢を保つ。

## 3 小学校への引継ぎ

### ○ 個別の教育支援計画・支援ファイル等の作成

幼稚園・保育所等での幼児の様子や周りの幼児とのかかわり、また、保育者の配慮や支援の内容、保護者の希望、かかわっている医療機関などを、できる限り具体的に記述し、保護者と協力して小学校へ引き継いでいきましょう。

保護者の負担感を和らげられるよう、保護者と学校との仲介役になりましょう



### ○ 就学相談・見学・体験入学の活用

特別な支援が必要な幼児と保護者が、就学前に小学校の先生と相談することや、学校見学、体験入学をすることで、小学校生活(授業、行事、通学など)の様子や実際に行われている指導の仕方を知り、見通しをもつことができます。実際に見たり、体験したりする機会をつくるよう小学校との連携を進めましょう。

## 2 アプローチ期のカリキュラムを見直そう

### (1) 「三つの力」を教育課程・保育課程から捉える

ねらい・・・幼児に育てほしい姿  
内容・・・幼児に経験させたいこと

の中に「三つの力」が入っているか

自園の教育課程・保育課程で、確かめてみましょう。



**生** 生活する力    **か** かかわる力    **学** 学ぶ力

<参考例> 5歳児10月～3月より 抜粋

	ね ら い	内 容
10月～12月	<p>○自分なりの目的をもって遊びに取り組み、実現しようとする。<b>生 学</b></p> <p>○学級の友達と気持ちを合わせることを心地よく感じ、学級の一員であることをうれしく思う。<b>か</b></p> <p>○生活の流れに見通しをもち、自分でできることを進んで行う。<b>生</b></p>	<p>・自分なりのイメージが実現できるように工夫したり繰り返し行ったりしてできた喜びを味わう。<b>生 学</b></p> <p>・学級の友達と相談したり力を合わせたりしながら取り組む中で、喜びや悲しみを共感し合う。<b>か</b></p> <p>・友達に励まされたり自分のしたことが認められたりするうれしさを味わう。<b>か</b></p> <p>・生活の流れに見通しをもち、自分たちで生活のきまりがあることに気付いて行動したりする。<b>生</b></p>
1月～3月	<p>○遊びや生活の中で言葉の楽しさに気付いたり、数や文字などに関心をもったりする。<b>学</b></p> <p>○1年生になることに喜びと期待をもつ。<b>生 か</b></p>	<p>・数や数字、言葉や文字などを取り入れて遊ぶ。<b>学</b></p> <p>・小学校を身近に感じたり、憧れたりして、1年生になることを楽しみにする。<b>生 か</b></p>

自園の教育課程・保育課程に「三つの力」が、入っていましたか？

P15～P20の「生活する力」「かかわる力」「学ぶ力」を参考にして

**生**・**か**・**学**で印して確かめ、押さえていきましょう。



## (2)「三つの力」を育てる視点から指導計画を見直す

〈参考例〉 三つの力の一つ「生活する力」について見ていきましょう。

### 生活する力

### 幼児の姿

○ 自分なりの過ごし方を考えて生活する。

- ・ 友達と話しながら、自分たちのペースで遊んだり生活したりしようとする。
- ・ 誕生会や運動会の行事の時には、自分たちでできることを考え、出番を意識して自覚をもって動くようになる。

〈指導の重点〉

- ・ 友達と生活する中で、自分たちでいろいろなことを進めようとする気持ちがもてるようにする。
- ・ 様々な行事や学級みんなで取り組むことに主体的にかかわり、自分たちでできることは何か、遊びを楽しくするにはどうするかなどの話し合いをする機会をつくる。
- ・ それぞれが出すアイデアを取り上げて実現できるようにする。

「保育者のかかわり」と「環境の構成」について、押さえられているか確認していきましょう。



#### 保育者のかかわり

・ “ああしたい”、“こうしたい”と自分で考えてやっていこうとする幼児を、あいづちを打ちながら、温かいまなざしで見守り任せるようにする。また、困っている時には一緒に考え、解決の方法を見つけられるようにする。

・ 友達とイメージを受け入れ合って、自分たちが考えたことを進めていくことができるよう、それぞれのイメージを受けとめる。そして、友達の中で気持ちや考えたことが伝わりやすいように、言葉を補っていく。

#### 環境の構成

・ 目的やイメージに合わせて場づくりをしたり、必要な物を選んで使えるようにしたりするために、様々な物(巧技台、段ボールなど)やいろいろな素材を使いやすいように置いておく。

・ 保育者や友達の動きを見て、自分にできそうなことを見つけて仲間に加わったり、「～までに〇〇をしよう」と意識しながら進めていったりできるように、その場の雰囲気づくりや状況づくりをしていく。

アプローチ期に、それまでの体験を生かし、遊びや生活の中で、自分たちでできることを考えてやっていこうとする姿を育てていくこと、“自分たちでやった”という実感をもつことが自覚や自信となり、その後の小学校の生活の中でも、学びへの意欲や主体的に学習に取り組もうとする姿につながっていきます。



「幼児が主体的に取り組む」という視点で「三つの力」を見ていきましょう。

## ■「三つの力」を育てるための実践例 ■

### □「生活する力」を育てる実践

#### 生活する力の一つ『自立心』とは・・・

生活の流れや周りの状況を感じて、自分でよいと思うことを行おうとしたり、自分の力で最後までやり遂げ満足感や達成感をもったりする。

#### 保育者の願い

生活や遊びの中で“こうするとよい”、“こうした方がよい”と感じたり考えたりしたことは、自分から行動に移せるようになってほしいと願う。自分の考えたことや行動したことを保育者や友達に認められることで自信をもち、満足感や充実感を味わう体験を大切にしていきたい。

#### 実践の展開

#### 「僕がやるわ」

10月

砂遊び後、片付けをしていた。A児・B児・C児たちは自分たちの使ったものや自分たちが遊んでいた周りに落ちている遊具を幾つもの拾い、水を入れたたらいに運んで丁寧に洗っていた。ほとんどのものを洗い終わると、一人、二人と足洗い場へ駆けていった。

D児は泥水になったたらいの中の水を流すと、たらいに砂が残っていないかを確認し、水をちょろちょろと出しながら、底に残った砂を洗い流した。保育者は「ありがとう。たらいがピッカピカになったね」と声をかけると、D児は「ピッカピカ」と言い、にっこりとした。

その頃になると、みんなは足洗い場へ行ってしまい、D児はみんなの様子をちらちらと見ながら急いでいるようであった。

D児がきれいになったたらいを倉庫に運ぼうと持ち上げたとき、たらいの外側側面や裏が、まだドロドロであることに気付いた。

保育者が「あとは先生に任せて」と言う

D児は「僕がやるわ」と言う。

足洗い場にいるみんなを気にしながらも、また水を出して、砂をきれいに洗い流した。

「ありがとう。最後まできれいに洗えたね、明日も気持ちよく使えるよ」と保育者が言うと、「これも運んであげるよ」と砂場の遊具を入れたワゴンを倉庫まで運んだ。



保育者とD児が保育室に戻ったときには、みんなは、いつも集まる場で待っていた。

保育者は、みんながそれぞれの遊びの場を片付けて、集まることができたことをまずは認めた。そして、保育者が一緒にいた砂場では、A児・B児・C児たちは自分が使った遊具だけでなく、他の幼児が片付け忘れた遊具も片付けていたことや、D児が遅くなったのは、みんなですべてのたらいを最後まできれいに洗ってくれていたからであることを伝え「自分の使ったものを自分できちんと片付けて、みんなと一緒に使うものまで片付けようとするようになってくれて、先生、すごくうれしかった。さすが、年長さんだね。」と大いに認めた。

## 『自立心』を育むために・・・



### 保育者のかかわりのポイント

- 幼児が“こうするとよい”と感じられる行動を、日常生活の中で保育者がモデルとして示しながら、子どもと一緒に行動する機会をつくっていく。
- 幼児が“こうするといいんじゃないか”と自分で気付いたり気に掛けたりする姿やそれを行動で表そうとする姿を認める。
- やり遂げたことに対して、満足感や達成感が味わえるような言葉を保育者の気持ちとともに伝える。

### 環境の構成のポイント

- 幼児が自分で気付いたことを行動しようとするときに、自分でできる物の配置や必要な物が整っているかを確認し、足りない物があればさりげなく用意する。
- 自分でよいと思ったことを最後まで取り組んだ行動を、学級の皆に伝える場や機会をもつことで、“自分もそうしてみよう”という気持ちをもてるような雰囲気をつくっていく。

### 幼稚園・保育所等で育てたい幼児の具体的な姿

- ◇ 生活の流れを予測したり、周りの状況を感じたりして、自分でしなければならないことを自覚して行う。
- ◇ 自分のことは自分で行い、自分でできないことは保育者や友達の助けを借りて、自分で行う。
- ◇ いろいろな活動や遊びにおいて、自分の力で最後までやり遂げ、満足感や達成感をもち、



### 小学校における育ちのつながり・教師が大切にしていること

- ◆ 小学校では、自分で判断して活動を進める場面が多くなる。友達や先生とのかかわりの中で、自分の考えに自信をもって活動を進めることを大切にしている。
- ◆ 子どもにとってやり遂げた満足感や達成感は、次の活動の意欲につながる。特に低学年では、自分の考えで行動したことが認められたときの喜びは大きい。子どもの発想で行った行動を認め、他の子どもたちに広げていくことを通して、自主性や粘り強さを身に付けさせていくことも大切にしている。

アプローチ期には、自分の考えや行動に自信がもてるように、様々な場面で、認められたり褒められたりする経験を積んでいくことが大切です。



## □ 「かかわる力」を育てる実践

### かかわる力の一つ『言葉による伝え合い』とは・・・

自分の思っていることや考えを自分の言葉で話したり相手の話を聞いて分かたりして、みんなで楽しく過ごすために、思いを出し合って話し合う。

### 保育者の願い

- 自分の気持ちを言葉で表す力が身に付くことによって、共感してもらったり別の考えを聞いたりして、周りの人とのつながりができていく。幼児が感じていることを言葉に表す力を育てていきたい。
- 一人の幼児のもっている思いを保育者が受け止めて、他の幼児たちと話し合う場をつくることによって、幼児たちは思いを共有し、それぞれが考えた意見を言って、皆で納得し合える方向を見つけれられるようにしていきたい。

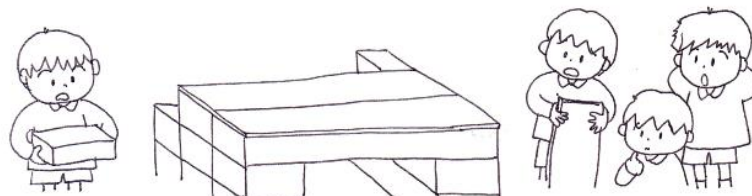
### 実践の展開

#### 「一生懸命作ったから壊したくない」「その気持ち分かるよ」 10月

「子ども祭り」が終わり、年長組が保育室に作ったお化け屋敷を片付けることになった。

幼児たちは「僕たち、がんばって作ったよな」と話しながら片付け始めた。

**A児**は「やっぱり片付けたくない」と言って手を止めた。それを聞いた**B児**が「どうしてだよ」と、怒ったように言った。**A児**は「一生懸命作ったから壊したくない」と答えた。それを聞いた**C児**と**D児**は「その気持ち分かるよ」「僕もだよ」と口ぐちに言った。**B児**は「ぼくも悲しいよ。だけど、片付けないと他の遊びができないよ」と言った。



話を聞いていた保育者は、学級の皆を集めて**A児**や**B児**の思いを伝えた。そして保育者は「頑張って作ったから壊したくない気持ちも分かるし、元に戻して過ごしたい気持ちも分かるし、どうしたらいいかな？」と投げかけ、皆で話し合うようにした。

幼児たちは「片付けないでおうか」「やっぱり元に戻したい」「そうだよ。他の遊びもしたいな」などと意見を出し合った。そして、「片付けてから、またお化け屋敷を作る?」「片付けると、みんながしたい遊びができるよ」という意見が多くなった。

保育者は「Oちゃんの意見を聞いてOちゃんはどう思った?」と、発言をしていない幼児の思いも聞くようにした。幼児たちは「片付けた方がいい」「元に戻したい」という考えを言った。

保育者は「AちゃんとBちゃんはどう思う?」と聞いてみた。**A児**は「戻して違う遊びをする」と言い、**B児**も「僕も」と言って、みんなと一緒に片付けに取り組んだ。

## 『言葉による伝え合い』を育むために・・・



### 保育者のかかわりのポイント

- 保育者は意見の違うどちらにも共感する立場を示し、学級の皆が様々な意見を出しやすいようにする。
- 発言をしていない幼児に「〇ちゃんはどう思う？」と、投げかけて思いを引き出し、自分の言葉で発言できるようにする。

### 環境の構成のポイント

- 学級の中で、皆にかかわることが起きたときには、共通の話題として学級の皆で話し合う場を設けていく。
- 「思いを率直に表しても大丈夫。受け止めてくれる先生や仲間がいる」ことを幼児が感じ、安心して話すことができる雰囲気をつくる。

### 幼児期の終わりまでに育てたい幼児の具体的な姿

- ◇ 相手が話す思いや考えが分かり、自分の思いや考えと比べてみる。
- ◇ 友達の意見に耳を傾けて共感したり、異なるときは、自分の意見を伝えたりする。
- ◇ 皆の話合いでは、人の意見を聞いて考え直したり、折り合いをつけたりする。



### 小学校における育ちのつながり・教師が大切にしていること

- ◆ 生活する中で、言葉は他の人とコミュニケーションを図る上で必要不可欠であり、また、学習を進める上で基盤となるものである。たくましく生きる力を育むために、国語の授業だけでなく、すべての教育活動を通じて、言語能力を高めていく。
- ◆ 幼児期に友達同士のかかわりや、言葉による伝え合う活動を十分している子どもは、小学校入学後も様々な集団の中で、積極的に活動に参加したり、自分の思いや考えを言葉で伝えたり、集団の中で安定した生活を送ったりすることができる。

アプローチ期には、言葉を通じて意思表示をしていく体験、仲間の中で相手の話を聞いて分かり合っていく体験を積み重ねていくことが大切です。

## □ 「学ぶ力」を育てる実践

### 学ぶ力の一つ『数量への関心・感覚』とは・・・

生活や遊びの中で、数量に関心を持ち、必要感をもって数えたり、比べたりする。

### 保育者の願い

園の生活や遊びの中では、“分ける”“同じにする”“比べる”などの数に関する様々な学びをしている場面がある。幼児たちが自分の生活に密着した出来事の中で、数との対応を楽しみながら、数量への興味・関心が高まるようにしたい。

### 実践の展開

#### 「そうだ！順番に一つずつ取ろう」3月

「ひなまつり会」のおやつに、丸い粒のひなあられを用意した。幼児たちは、4人の仲良しグループごとに机を囲み、自分で作った折り紙の菓子箱を持っている。保育者は、「4人で分けて食べようね」とだけ伝え、机上中央の菓子器にあられを入れた。

1グループの4人は顔を見合わせた後、「そうだ！順番に一つずつ取ろう」とA児が言う。A児があられを一粒、手元の菓子箱に入れると、「次、B君」と言う。B児も同じように、あられを一粒取る。「今度、僕？」とC児が尋ねると、A児たちがうなずきC児も一粒取る。「次は僕」とD児があられを一粒取る。こうして順に一粒ずつ自分の菓子箱にあられを入れることを繰り返した。

2グループは、E児が「5個ずつ取る？」と言う。すると、4人で声を合わせて「いーち」「にーい」と数えながら、順番にあられを5粒取り始める。「じゃあ、もう一回」とF児が言い、再度5粒ずつ取ることを2回繰り返した。

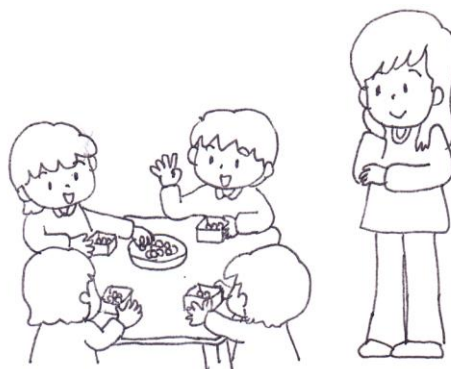
3グループは、「僕が10個ずつ分けるね」とG児が言い、H児・I児・J児と自分の菓子箱にあられを10粒ずつ入れた。まだあられが残っているのでG児は迷わず二順目に取りかかった。H児に10粒配り、I児に4粒目を配るころ、I児が「なくなっちゃう」とつぶやく。

G児が「今の4個だったよね。それ返して」「H君ももう一回」と“二順目に配ったあられを返してほしい”と伝えた。するとH児とI児があられを戻し「どうする？」と聞く。

J児が「じゃあ、次は5個ずつ入れる？」と聞き、G児が再び配り始めた。

“4人で分けるには…”と気の合う友達とアイデアを出し合い、様々な方法で分け合ったり、“同じように分ける”ということをとくさんのものを数えながら実感したりして楽しんだ。

保育者は幼児たちの様子を見守り、「自分たちでいい方法を考えたね」と大いに認めた。





## 『数量への関心・感覚』を育むために・・・



### 保育者のかかわりのポイント

- 正確に数えたり読んだりすることなどを目指すのではなく、幼児たちが友達と一緒に考えを出し合い、納得しながら取り組む姿を温かく見守る。
- 数量や大きさなどに関心がなかったり、分からなかったりする幼児もいます。友達に助けってもらったり、保育者が一緒に数えたりしながら、“自分もできた”“友達と一緒に楽しかった”という気持ちを味わえるようにする。

### 環境の構成のポイント

- 活動の時期に応じて、何人の友達となら思いや考えを言い合えるのか、誰となら話したり聞いたりし合えるのかを考慮しながら、一緒に活動するグループを決めたり、幼児たちの様子を見守ったりする。
- 幼児たちが手に取って、並べたり数えたりしやすいものを使うようにする。

### 幼児期の終わりまでに育てたい幼児の具体的な姿

- ◇ 生活や遊びを通じて、自分たちに関係の深い数量などに関心を持ち、必要感をもって数えたり、比べたり、組み合わせたりする。



### 小学校における育ちのつながり・教師が大切にしていること

- ◆ 入学前に児童が習得している数量や図形に対する概念、知識や生活体験にはかなりの個人差がある。  
小学校の算数では、具体物と数図ブロック等を1対1対応させながら数概念を育成していく。  
その後、数図ブロック等を操作する活動を通して簡単な計算ができるように指導を進める。  
10を単位として数を捉えていくことも、数図ブロック等を操作することで理解させる。



教科書の上に置かれた数図ブロック

- ◆ 幼児期に、生活体験の中で具体物の操作を通して数に親しむ経験を多くもつことは、数の概念形成につながる。また、数量への関心・感覚がある子どもは、学ぶ楽しさを感じ、意欲的に取り組んでいくことができる。

## □ 三つの力を総合的に育てる実践

前ページまで、三つの力についてそれぞれに実践例を挙げてきました。これらの三つの力は別々に育っていくのではなく、いろいろかかわり合って育っていきます。

ここでは、アプローチ期（10月～3月）前期の大きな行事「運動会」の種目でよく取り上げられる「リレー」を通して、三つの力を総合的に育てる実践を紹介します。



### 昨年の運動会から <言葉による伝え合い>

（4歳児では、「かけっこ」やコーナーポストを回って次の幼児へタッチする「直線リレー」も経験している）  
運動会でどんなことをしたいか幼児たちに投げかけると、昨年の年長児の姿を思い出したり、運動会後に体験したことを思い出したりして、「リレーがやりたい」「綱引きもいいよね」「ダンスはポンポンを持って踊りたい」「旗もかっこいいよ」などと声がる。

そこで、その中のリレーをやってみようということになり、幼児と一緒に、園庭にトラックのラインやスタートラインをかいた。始めは、一人一周を走り、次の幼児にタッチをして交代していた。

### エンドレスリレー <体を動かす心地よさ>

リレーの面白さの一つは、次の幼児へタッチすることである。走ることが好きな幼児は、一周走り終わるとまた列の後ろへ並び、何度も繰り返すエンドレスのリレーになる。この段階でクラスの全員が一度は参加し経験できるようにする。そのうち、やりたい幼児が増えてきたら、何度も走れるように2チームにし、色帽子でチームの色をそろえる。

2チームになると、走り出すタイミングは異なるが、自分と同じようなタイミングで走る相手チームの友達を意識するようになる。競争したいという幼児も出てきて、誰と走るか、相手探しをする。

### 勝敗への意識 <リレーに必要なもの・ルールの確認（規範意識）>

「先生、どっちが勝ったか分からないよ」といった声がる。ここで、昨年の年長児はどのようにしていたかを思い出させてみると、「丸いの（バトン）もってた。」

「最後の人はこんなの（たすき）をしていた。」と思い出す。

そこで道具を用意し、2チームに分かれてから始める。

勝負を意識するようになると、誰と走るかにこだわりをもつ幼児もいれば、相手にはこだわらず仲間意識から仲のよい幼児と同じチームになる幼児もいる。また、少しずつコーナーを速度調整してうまく走る姿が見られたり、ラインぎりぎりを走ろうとしてコーナーの中に入り、他の幼児から指摘される様子が見られたりする。

ここで、トラック内に入ることはいけないというルールを確認する。



## 人数調整 <数への関心>

誰と走るか意識できるように、走る順番で並ばせてみる。このとき、人数調整の必要性が出てくる。前から順に手をつなぎ「1. 2. 3. …」と、ペアを数えていくと片方のチームに人数が足りないことに気づき、仲間を呼びに行き、数合わせをするようになる。人数をそろえて始めると最後の走者（アンカー）がゴールするのを見て、その勝敗が分かるようになり、喜んだり、悔しがったりする。保育者は、どのチームも勝ったり負けたりする経験ができるようにする。

## クラス内リレーからクラス対抗へ <思考力><調整力>

チーム決めは幼児たちと相談で決める。足の速い幼児が集まることもあり、それではずるいとメンバー調整が始まる。なかなか勝てないチームは次第に元気がなくなり、対戦前から「どうせ〇〇チームが速いに決まってるよ」と消極的な声が聞かれる。保育者はこのことをクラスの皆の前で投げかけた。「いつも負けてばかりだからつまらない」という声に、「じゃ、僕が入ってあげるよ」「え、それじゃ、一人足らなくなっちゃう」「それなら、私が2回走ってもいいよ」と他チームから声上がる。このころには、大体友達の走る速さや頑張っている様子、自分の速さなどが分かるようになる。また、勝敗へのこだわりから、「バトンを落としちゃったから負けちゃった」「渡すときに他の子とぶつかったから」と負けたときのことを振り返り、「今度はちゃんと声を出してバトンを渡そう」など、どうするとよいかを考えるようになる。

## チーム名を考える <チーム意識・文字への関心>

チームのメンバー構成が決まると、「チームで共にかんばる連帯感」も生まれる。すると昨年の年長児がかっこいいチーム名を名乗っていたことを思い出しチームの名前を考え始める。

「(足の速い) チーターチーム」「(強そうな) ドラゴンチーム」等、相談が決まると保育者が紙に書いてクラスの皆に紹介する。このころ運動会のプログラムも画用紙に書いて張り出しておく、見合っては文字を拾い読みしたり、自分たちの出番など、順番を意識したりするようになる。



## 勝ちの喜び、負けの悔しさを味わい、次へつなげる <協同性>

リレー後、各チームとも結果に一喜一憂している。対戦チームのメンバーが分かると、自分のチームのメンバーと話し合い納得して順番を決める。しかし実際に走ってみると、アクシデントも起きる。勝つ直前で転んでしまい、負けて悔しくて泣きだす仲間に、「大丈夫？」と心配し、「しょうがないよ、今度は、がんばろう」と声をかける姿もある。仲間の声援やなぐさめ、励ましがあって、共に勝つ喜び、負けた悔しさを味わいながら、リレーを通して、チームの仲間とのつながりが深まっていく。

幼児たちは、リレーを終えるたびに「次回こそは」と自分たちで作戦会議を行う。「転ばないように走るにはどうしたらいいかな？」という問いに、「みんなで走る練習をしよう」「足の速い〇〇ちゃんの走り方をまねしてみよう」とか、「バトンがうまく渡せるようになりたいな」「声を出すといいかもしれない」などと、幼児たちはアイデアを出し合っていく。



足が速い幼児もいれば遅い幼児もいて能力差があります。大切なのは、その幼児なりに精一杯、一生懸命走ることです。そのためには保育者が、一人一人のがんばりを十分に認めていくことが大切です。一人一人のがんばりが、クラスの中で友達からも認められて、声援を受けたり、友達を応援したりして、“みんなで力を合わせてがんばった”と実感できることが大切です。

これは、リレー・綱引きといった集団での競技に限らず、縄跳び、フープ回し、鉄棒、跳び箱といった個人で取り組む運動でも同じで、“どれだけその幼児なりに意欲的に取り組めるようになるか”が大切です。たとえ今はできなくても、取り組むうちに少しずつコツをつかみ、がんばることを続けていくうちに可能性を感じてきます。途中であきらめないで取り組み続ける姿勢を育てていくことが大切です。

そのとき、支えや刺激になるのが、保育者の励ましやアドバイス、友達の取り組む姿です。



あるクラスで、特別な支援が必要なA児は、なかなかリレーに参加しようとしませんでした。クラスの皆は「どうしてやりたくないのか」A児の気持ちを分かろうとし、それぞれ思っていることをA児に伝えました。

「順番が分からないなら、僕が教えてあげるよ」「たくさん走るのが疲れるなら、私がたくさん走ってあげるよ」「僕とB児でA児を挟んで走る順番はどう？」A児もクラスの一員として、一緒にリレーに参加するにはどうしたらいいのか、皆の考えを出し合いました。

「走らない!」「嫌だから」と言っていたA児でしたが、少しずつ、“順番に並ぶ”、“少し走って次の子にバトンを渡す”、“走れるだけ走る”とステップアップし、最後にはトラック一周を走りきるようになり、皆から「Aちゃん、やったね」と拍手をいっぱいもらって受け止められました。

#### ◆ 保育者のかかわりのポイントと環境の構成のポイント ◆

このような育ちが見られるようになるには、保育者が日ごろから集団の中での一人一人の心の揺れを見つめ、その幼児のもつ特性を引き出し、どの幼児も、クラスの大事な存在として認められるようなかかわり方を積み重ねていくことが大切です。

また、クラスの一部で起きた出来事も皆の共通の話題として取り上げ、自分のこととして考えたり、困ったことを解決するための知恵を出し合ったりする状況をつくり出すことや、“〇ちゃんは～が得意だよ”“◎ちゃんは、私が転んだとき心配してくれた”と友達の持ち味や優しさを感じとり、互いに認め合う温かい雰囲気づくりを心掛けていくことが大切です。